あなたは私の友　　ヨハネ 15:12-17

さきほど賛美しました有名な歌「いつくしみ深き」はジョセフ・スクライブンという方が詩を書きました。この人は、1820 年アイルランドで生まれ、1845 年、25 歳の時にカナダ、オンタリオ州のポートホープにやってきました。その地で家庭を築こうとし、いよいよ明日は結婚式という時、なんと婚約者が事故で亡くなったのです。彼は大きな悲しみに投げ込まれましたが、絶望に落ちこむことなく、かえってそれによって主イエスに近づき、その後、彼は、主イエスのように大工仕事をしながら貧しい人を助け、病んでいる人を慰め、徹底して他の人のために生きる人生を送りました。

1857 年、37 歳の時に彼は、遠く離れたアイルランドにいる母親が病気であることを聞き、母を慰めるためにひとつの詩を書きました。それに曲がつけられ、まさに出版されようとしていた『ゴスペル・ヒムズ』（福音讃美歌集）の最後の曲として加えられました。この詩こそ「いつくしみ深き」という誰もが知る賛美歌となったのです。この賛美歌、「いつくしみ深き」は今日の聖書の箇所ヨハネ 15:15 の「わたしはあなたがたを友と呼んだ」というイエスの言葉に基づいています。キリストが私を友と呼んでくださることにはどんな意味が込められているのでしょうか？

1.慰めへと招かれている

人は誰もが、自分のことを分かってくれ、慰め、励ましてくれる「友」を必要としています。特に辛いことがあったり、心が深く傷ついたり、孤独を感じるときはなおのことです。そんなとき、心を開いて話すことができる「友」を持っている人は幸いです。いや、たとえそんな人がいたとしても、この世の「友」はいつかは世を去っていきます。別れがきます。しかも、親しい友であればあるほど別れは辛いですね。年齢を重ねて寂しく思うのは、家族、友人、知人がひとり、ふたりと世を去っていくことです。若い人であっても学校を卒業したり、転勤になったりして、同じような寂しさを味わうことがあります。スクライブンの母親も病気になって、そんな心細さを味わっていたと思います。そんなとき、息子から届いた「いつくしみ深き」の詩は、どんなに彼女を励ましたことでしょう。世の友は去っても、イエスは去ることはない。どんなときでも、イエスはわたしたちの「友」となって、いっしょにいてくださるのです。

「いつくしみ深き」の賛美の二番目の歌詞はこうです。

いつくしみ深き　友なるイエスは
われらの弱きを　知りて憐れむ
悩み　悲しみに　沈めるときも
祈りにこたえて　慰めたまわん

「友」であるイエスがわたしたちの痛み、苦しみを知っていてくださる。試みの日にいっしょにいてくださる。これにまさる慰めはありません。「いつくしみ深き」の賛美のとおり、イエスはわたしたちを「友」と呼び、この慰めへと招いていてくださるのです。

2.使命に招かれている

イエスはまた、わたしたちを「友」と呼ぶことによって、「人類の救い」という大事業のパートナーに、わたしたちを招いておられます。15 節に「わたしはもう、あなたがたをしもべとは呼ばない。しもべは主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです」とあるように、イエスは、ご自分がこれからなさろうとしていることについて、事細かに弟子たちに告げ、ご自分の心のうちを弟子たちに打ち明けました。イ

エスの時代には「しもべ」は主人から言いつけられた仕事を果たしさえすればよいので、なぜ、その仕事をしなければならないのか、それがどんな意味を持っているのか知らなくても良かったのです。現代でも、経営者が会社の経営についていちいち社員に知らせたりはしません。仕事の命令を与えるだけです。管理職と言えども、基本は仕事がちゃんと進んでいるかどうかを見るということです。けれども、仕事のパートナー（共同経営者）には、経営方針や将来の見通し、またリスクについて詳しく打ち明けます。イエスもまた、弟子たちを、そしてわたしたちを「友」と呼んで、ご自分のパートナーとされたのです。

イエス・キリストの救いは、「ゴルゴダ」、または「カルバリ」と呼ばれる処刑場に立てられた十字架の上で成し遂げられました。紀元 326 年に、イエスがそこに架けられたとされる十字架がカルバリの跡地で見つかりました。それは「聖十字架」と呼ばれて保存されたのですが、今では、それがどこにあるかは誰も知りません。しかし、わたしたちにとって大切なのは、材木としての十字架ではありません。それは考古学者には意味あるものでしょうが。最も重要なことは十字架が語るメッセージ、「十字架の言葉」です。イエスはご自分がかけられた十字架が記念碑として保存されることを望まれませんでした。十字架は、過去のもとのとして、特定の場所にとどめられるものではなく、全世界に、時代から時代へと変わりなく伝えられるべきものなのです。イエスが望んでおられるのは、すべての人の心にキリストの十字架が描き出され、人々が十字架の救いを受けることなのです。

そのためには、「十字架の言葉」、つまり、救いのメッセージを語り伝える人々が必要です。十字架が「救いを得させる神の力」であることを証しする人々が必要です。十字架の救いのメッセージを次の世代に伝えていく働きが必要です。イエスはこの働きを、ご自分の弟子たちに委ねられました。続く 16 節に「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり」とある通りです。「行って実を結ぶ」とは、弟子たちの伝道や証しによって、人々がキリストを信じ、キリストに従うようになることを意味しています。教会が建てられ成長し、神の国が拡大していくということです。

わたしたちは、この使命を自分たちの力だけで果たしていくのではありません。イエス・キリストという最高のパートナーといっしょに果たしていくのです。「友」であるイエス・キリストは、いつもわたしたちと共にいて、わたしたちを導き、助け、力を与えてくださるのです。イエスは 16 節で「また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです」と言っておられます。ひとりでも多くの人がキリストを信じ、成長することは、父なる神のみこころです。ですから、そのことを大胆に求めて良いのです。「イエス・キリストの名によって」求めるなら、それは与えられると、イエスは約束されたのです。だから、わたしたちは、この使命がどんなに困難でも、あきらめずに、それに励むのです。「友」であるイエスに信頼し、「イエスの名」によって助けを呼び求めて励むのです。

3.愛に招かれている

イエスはわたしたちを「友」と呼んで、わたしたちをご自分の「慰め」に、またイエスとともに果たす「使命」へと招いてくださいました。さらに、イエスは、わたしたちを「友」と呼ぶことによってわたしたちをご自分の「愛」へと招いておられます。

今朝の箇所は、12 節の「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。」という言葉ではじまり、17 節の「あなたがたが互いに愛し合うこと、これが、わたしのあなたがたに与える戒めです。」という言葉で終わっています。イエスがわたしたちを「友」と

呼ばれたのは、わたしたちに「互いに愛し合う」ことを教えるためだったのです。

わたしたちが互いに愛しあう愛は、イエスがわたしたちを愛してくださった愛です。イエスは「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」（13 節）と言われました。他の命を守るために自分の命を捨てるというのは簡単にできることではありません。だからこそ、それは「これよりも大きな愛はない」と言われるのです。イエスは、「あなたがたはわたしの友だ」と言われたとき、「わたしは、あなたがたのために命を捨てたほど、あなたがたを愛している。これ以上大きな愛はないという愛で愛している」と言っておられるのです。最近、若い人と話をしていると三浦綾子さんの「塩狩峠」を読んだことはない、あるいは名前は聞いたことがあるけれどどんな本なのかは知らないという人が意外と多いことに気づきました。それで自分自身ずいぶん年をとったのだと自覚しました。北海道の JR 昔国鉄といった時代、クリスチャンであり、婚約までしていた永野さんという職員がいました。ある冬の日、乗っていた列車が塩狩峠にさしかかった時にブレーキが効かなくなり、そのままでは列車は線路から外れて大事故となるところ、永野さんは自ら列車の間に飛び込み、自らの身体をもってブレーキとし、列車を止め、大事故を防いだという実話に基づいて書かれた小説です。もちろん、誰もかれもこんな犠牲を払うということは出来ないでしょう。しかし、この永野さんという青年クリスチャンは素晴らしい人ですがこの人がそんなことをする動機となったのはイエス・キリストの十字架における死であったことに目を向けたいと思うのです。イエス・キリストの真実な愛が永野さんにそのような行動を取らせたということです。

私たちは子どもから大人まで毎日、心のどこかで真実な愛は無いだろうかと探しながら生きているのではないでしょうか。時にはそれを試したりします。そして結局、そんなものは無いのだと妙に納得しながら落ち込みます。人にそれを期待するなら残念ながら常に裏切られます。あなたが理想の自分自身でないように、人もあなたの理想の人ではないし、それを願っても理想の人にはなれません。それが時には他人にとって迷惑なこともあるかもしれません。私も時々、「森田先生はそんな人だとは思っていませんでした」「先生はそんなことを言わないと思っていた」と言われることがあります。申し訳ないですが「そんな人だったんです！」でも人にどう見られるか、どう思われるかは大したことではありません。大切なことは主イエスに期待をかけても裏切られることはないということです。

イエス・キリストは、見ず知らずの者であったわたしたちを愛して、ご自分の「友」としてくださいました。そればかりか、「友」であるわたしのために命を捨ててくださったのです。これよりも大きな愛はありません。わたしたちはこの愛に招かれています。人間関係で辛い目にあったり、裏切られたりすると人を信じることを控えたり、躊躇するようになります。それがイエス・キリストを信じることの足かせとなるかもしれません。しかしイエス・キリストは信じる者を落胆させることはありません。むしろイエス・キリストを信じることによって真実な神の愛が分かり、自分の罪が赦されることを通して人の罪を赦せたり、それどころが他の人にたいする尊敬や労りの心が芽生えてゆくのです。自分自身の人生を振り返ってそうだと確信しています。

今日、まだイエス様を信じていない方は真実な友となってくださる主イエス・キリストを信じ受け入れていただくことをお勧めいたします。またすでにクリスチャンの方にとって、この私をキリストの友として招き、神様の大きなご計画を共に進めるためにパートナーとしてくださっていることを喜び、主に従ってゆきたいと願わされます。